

特集

或る

レトロなビルの
お話。

最近よく聞く「リノベーション」という言葉。
既存の建物に大規模な工事を行うことで、
性能を新築の状態よりも向上させたり、
価値を高めたりすることを指す。
この言葉がはやる前からずっと先んじて、
かなりユニークな再生に取り組んできたビルがある。
鹿児島市名山町にあるレトロフトビル。
オーナー夫妻の理想が少しずつ形になり、今では
界隈の人の流れを変えてしまうほどの存在となった。
マイペースでありながら、決して妥協はしない。
その潔さが醸し出す心地いい空間には、
今日もたくさんの人が集つ。





壁のくすみが雰囲気を醸し出すレトロフトビル。1階の柱には店舗のピクトグラム（絵文字）が描かれている。



来店した客に気軽に話しかけるオーナーの永井明弘さん。新しい出会いがこうして生まれていく。

リノベーションで 建物の付加価値を高める

鹿児島市役所近く、電車通りに面したレトロフト千歳ビル（以下、レトロフトビル）は、1・2階にテナントが入居し、3〜5階がアパート部分になっている。また、2階にはギャラリーも併設されている。日に焼けてちよつとすすけた外観は、どこにでもある古いビルとなら変わりが無い。しかしこのビルがほかのビルと一線を画すのは、そのユニークなコンセプトにある。キーワードは「長屋」。仕掛け人はオーナーの永井明弘さん、友美恵さん夫妻だ。レトロフトビルは、戦後まもなくゴム靴や地下足袋などの卸を営んでいた明弘さんの実家でもある千歳商店が、1966年に千歳ビルを建てたのがそ



レトロフトビルオーナーの永井明弘さんと、奥様の友美恵さん。二人の思いが、レトロなビルを素敵な空間へと変えていった。

の前身だ。当時としてはモダンだった鉄筋の5階建てに、1階は靴の店舗、2階は倉庫、3〜5階がアパート部分としてオープン。その後、1・2階をテナント賃貸に変更して経営してきた。しかし2000年、明弘さんの父が亡くなり、永井さん夫妻は否応なくビルのオーナーを引き継ぐことになった。当時、明弘さんは造園デザイナーとして、友美恵さんは染織家として活動していた。

「最初は正直、面倒くさかったんです。月に一度、不動産会社との定例報告会があるのですが、老朽配管の水漏れやトイレ詰まりの話とか全然クリエイティブじゃなかった。二人で暗くなったのを覚えています（笑）」

このまま、ただの古いビルとして賃貸業務を続けていくだけでは面白くない。どうにかして、もっと活気のあるビルに生まれ変わらせたい。そこで二人は、アパートをリノベーションすることで建物の付加価値を高めようと決意する。

住人が自由に改装できる 大胆なアパートを提案

2005年、当時空いていたアパートの一室の壁をぶち抜き、和室の畳を外し、壁を青色に塗り、コンクリートの天井をあえてむき出しにするなど大



写真提供：風間 克美

1960年代に撮影された貴重な写真。中央やや右よりの建物が現在のレトロフトビル。窓の形などが現在と変わっていないのが分かる。

胆な改装を行い、モデルルームとしてオープンした。

不動産会社からはやめたほうがいいと忠告されたが、そこには若いアーティストや作家などに住んでもらい、このビルを内側から若返らせていきたいという強い思いがあった。

「入居者自身も、自分の感性でリノベーションができるアパートにしたいこうと。壁を取ってもいいし、ペンキだけ塗っていい。この部屋を見ていただければ、それがアピールできるはずだと思います」

しかし残念ながらそんな思いとは裏腹に、2年間入居者は現れなかった。むしろ「何とかお願いして入っていただいた」のが、イラストレーターの江夏潤一さんだった。江夏さんはその後、このレトロフトビルでさまざまな役



割を担うことになる。アパート部分の入り口に打ち付けられたレトロフトの書体を考えたのも江夏さんだ。

江夏さんの居住にともない、アーティストの仲間がたびたびレトロフトビルを訪れるようになった。そのうちの一人が、ただひたすらイカの絵だけを描き続ける自称「イカ画家」の宮内裕賀さんだった。

「江夏さんの部屋を見て、単純にいいなと。当時働いていた仕事先に近いこともあって、ここに引っ越してきました。ここは本当に住み心地が良いです。ここからほかに動けるかどうか、ちよつと心配になるくらいです」と、宮内さんは笑う。

今年の6月に引っ越してきたばかりで、視聴覚作家という不思議な肩書きを持つ松本充明さんもこのビルのユニークな雰囲気引かれた一人だ。部屋の壁をぶち抜く住人が多い中、松本さんは昔ながらの畳の部屋をそのまま残した。基本はDIY。テーブルから



取材時に「レトロフトMuseo」で開催されていた、県内の若手アーティストによる展覧会。



松本さんの部屋は、奥の和室をそのまま生かしてリノベーション。手前に座っているのは、カホン奏者の平島聡さん。二人で開催するイベントのために、前日から松本さん宅にお泊り中。



2階のトイレ。入り口から便器までの通路に、ロッカーや本を設置している。



「トイレ展」を企画したデザイナーの花田さん。「ここにいると、いろいろなアイデアが湧いてくるんです」

打つことはご法度。展示方法などについても制限があるのが普通だ。しかし、ここでは自由に釘を打つていいし、出品者がどのように使っても構わない。この空間自体に触発されて、展示方法を考えてほしいと考えたからだ。

また、ギャラリースペースの奥には作家が滞在しながら作品を創作する、いわゆるアーティスト・イン・レジデンスとして、宿泊施設を設けているのも大きな特徴だ。

「ギャラリーといっても、音楽を奏でる人もいれば、演劇や舞踏をする人もいます。当初は若い人たちの発表の場として、国内外のいい作品を展示する場として考えていたのですが、今では空間が独り歩きしているような感じがですね。それはとてもうれしいことですし、ここから若い人たちが、どんどん羽ばたいてほしい。それを私たちも楽しみにしているんですよ」

オープンから2年間は、毎月一度「プチキャンパス」と称してさまざまなイベントも開催した。時には友美恵さんがミラノに留学した際の写真を流しながら話すこともあったが、当時はまだ限られた人にしかその存在は知られていなかった。

そこで大きな役割を果たしたのが、デザイナーの花田理絵子さん。永井さんが造園の仕事をしている時からの知



本棚まで、そのほとんどは手作りにするものだ。

全部で15ある部屋のうち、江夏さんや宮内さんのようなアート系の若い人がその半分を占める。たまに若い入居者だけが集まった住人会があり、みんなでご飯を食べたりすることもあって。特に宮内さんはその中で一番若いということもあり、料理のおすそ分けやお土産をいただくことも多いそうだ。

「長く住んでいらっしゃる年配のおばちゃんとお茶をすることもありますよ。そんな付き合いも、レトロフトならではのと思っています」(宮内さん)

階段や廊下は昔のまま。天井は少し剥げかけているところもある。正直、決してきれいであるとは言いがたい。「なかなかお金がなくて補修ができないんです」と、二人も笑う。しかし部屋に一步入ると、そこには住む人の思いによって生まれ変わった特別な空間が広がっている。

同じマンションに住んでいても、住人同士の関係が希薄な現在。そんな中、レトロフトビルの住人たちは「アート」という大きな共通項で結ばれ、それぞれの個性を尊重し、互いに助け合って暮らしている。自然発生的に生まれたその精神はまさに、江戸時代の長屋そのものだ。

作家が自由に展示できる ギャラリーをオープン

そんな少しずつ変わっていったアパート部分に比べて、2階は2000年頃からなかなか借り手がみつからず、ずっと空き店舗のままだった。2008年、鹿児島でデザインフェアのイベントが開催された際、空き店舗を会場として提供。専門学校の学生たちによる展示が行われた。それを見た二人は、この空間をギャラリーとしてリノベーションすることを思いつく。

現在使われているレトロフトの名称は、このギャラリーの構想を練っている際に「レトロ+ロフト(住居スペース)」という言葉から誕生したものだ。そして翌2009年、2階の半部分を「レトロフトMuseo(ムゼオ)」としてオープン。「Museo」とはイタリア語で美術館の意味であり、鹿児島弁で「かわいいい男の子」という意味もある。

通常ギャラリーでは、壁に釘などを

1階のレトロフトチトセ。コンクリートがむき出しの天井の下には、約5,000冊の本が並んでいる。



明弘さんがレトロフトチトセの工事が始まる前に描いたイメージ図。本棚のイメージは、ほぼそのままだ。

むき出しのコンクリートの天井からは電球がぶら下がり、無数のボックスがでこぼかに配置された本棚を照らしている。地下室は1階と吹き抜けてつながっており、現在は毎週金曜日に市場が開催されたり、さまざまなイベントが行われる「リゼット広場」として活用されている。

ブックバサージュを軸に レトロフトチトセ開業

1階の白いのれんをくぐって扉を開けると、天井まで積み上げられた凸凹の本棚が来店客を出迎えてくれる。この本棚を壁代わりに、喫茶店や着物屋、レストランなどが軒を連ねているのが「レトロフトチトセ」だ。本棚のすき間からはそれぞれの店内を見ることができ、独立したスペースを確保しながらもどこかつながっているような印象を受ける。

そして2010年に開催されたのが「トイレ展」。衛生陶器メーカーや乳酸菌飲料メーカーともタイアップし、「日本一広いトイレ」としてメディアでも大きく紹介された。このイベントにより、「レトロフトMuseo」の名前は一気に知られるようになっていった。「レトロフト」となって、画期的な出来事でした」と、二人は当時を振り返る。このイベントの翌年、スイーツ販売の「FUKU+RE」が「トイレ展」で使用したスペースに入居。それに伴い、トイレは縮小され、きちんと壁が設けられた。とはいえ、今でもその存在感は抜群だ。

まるで鰻の寝床のように伸びた細長い通路からは、ガラス越しに不思議なインスタレーション（空間デザイン）が見える。一番奥に設置された便器は、なぜか6段の階段の上に設置されている。まったく落ち着かないことは保証するので、興味のある方はぜひ。



「KISSACO MITSUTA」と「花の木ファームラボ」の壁に開いた小さな穴。ここでコーヒーの受け渡しを行う。

この地下室を釣り堀として使おうかと、かなり本気で考えたこともあった。そんな時、明弘さんが知人から（笑）」と明弘さん。

「まず安井さんに出店を決めていたことが大きかったですね。私たちの構想はまず、書店があつてのものでしたから」

友美恵さんは染織家らしく、本棚の色にもこだわった。古書は新しい本よりも使用感があるため、本棚を通常の



松本さんが2カ月に一度開催しているイベント「クロワズモン（フランス語で「交差するもの」という意味）」。生演奏とトークセッションが行われた。

レトロフトチトセの誕生は、40年近く入居していたカメラ店の退去が決まったことから始まった。

「ワンフロアが空くということになり、さてどうしようかと。最初はフロアをいくつか区切つて貸し事務所にして、そのうちのいくつかは私たちが愛するおいしいパン屋や喫茶店、花屋などに入居してほしいなという写真を漠然と考えていました」

2011年8月、カメラ店が退去。1階内部を改装のために解体していると、何と地下室が出てきた。しかも4部屋。「確かに子どものころ、はしごで下りた記憶もあったのですが、解体するまですっかり忘れていたんです（笑）」と明弘さん。

送ってもらった一枚の写真が、レトロフトチトセの方向性を決定づけた。

「それは、パリにある「メルシー」というブックカフェの写真でした。そこはまるで、本棚の中にカフェがあるような感じでした。今でこそこの形態はそんなに珍しくはありませんが、当時国内ではそんな場所はまだまだ少なかったんです」

通路の両側に並んだ本棚の回廊（パサージュ）を中心に、コーヒーの香りが漂い、本棚の向こう側に違う景色が見える場所。そして文化を発信していける場所。そんな場所にしたいと考えた。

解体作業が進むなか、無機質なコンクリートに覆われた1階を面白がつてもらえればと、県内の古書店オーナーに集まってもらい見学会を実施した。この時、古書店オーナーを集めてくれたのが谷山に本店を構える「古書リゼット」のオーナーである安井一之さんだった。

もともと永井さん夫妻とは顔見知りだったが、これがきっかけとなり、「入居しませんか」という誘いに二つ返事で承っていたという。

白や生成りにすると少しくすんで見える。そこで友美恵さんが思い出したのが、以前ローマで訪れた文房具店の包装紙だった。

少し緑がかった青がきつと古書にも合うと、大切に保管していた包装紙をペンキ屋に見せて、忠実に再現してもらった。また建築家のアイデアで、本棚も平面ではなくあえて凸凹に配置をした。こうして2012年4月、レトロフトチトセが開業した。

当初入店していたのは「古書リゼット」のみ。そこから少しずつテナントが増え、現在は7店舗。まだ、地下室が2

つ残っているが、「もともと3年計画ですべての部屋に入っていただけはいと考えていたので」と、二人はいったつてマイペースだ。

こだわりの直火焙煎コーヒーを提供している「KISSACO MITSUTA」には、来店客だけでなく永井さん夫妻や他店舗のオーナーも足しげく通う。アパートの住人である宮内さんが週に何度かお手伝いをしており、その地下室に今年オープンした「マメチカ焙煎所」には宮内さんの絵が飾られている。

自家農場で生産されたハムを使っ



- 1 [tawaraya]ではレンタルの着物を着てもらい、町を散策してもらうサービスも行っている。
- 2 農園レストラン「森のかぞく」は、オープン以来昼夜を問わずに大勢の人でにぎわう。
- 3 写真家の安藤アンディさんの作品を展示している「カベレフト」。
- 4 江夏さんが描いた「花の木ファームラボ」のイラスト。
- 5 「花の木ファームラボ」は、南大隅町根占に農場を構える花の木農場直営のお店。
- 6 コーヒーのことが大好きな満田和徳さんがオープンさせた焙煎珈琲の店「KISSACO MITSUTA」。
- 7 デザインやイラストを手がける「studio pekepeke」は、1階のインテリアやチラシなども担当。
- 8 「マメチカ焙煎所」では、宮内さんのほか県内アーティストの作品が展示されており、購入することもできる。
- 9 鹿児島島の郷土菓子「ふくれ菓子」を大胆にアレンジしたスイーツを販売している「FUKU+RE」。

たサンドイッチなどを販売している
「花の木ファームラボ」とはお隣さん
で、四角い小さな窓でつながっている。
「KISSACOMITSTUTA」
のコーヒーはここでも注文することが
でき、そのコーヒーを受け渡すために
設えられたものだ。道路に面したガラ
スには、江夏さんが描いた大きなイラ
ストが目を引く。

昨年7月にオープンした農園食堂
「森のかぞく」は、新鮮な有機野菜が
おいしく食べられるとすぐに人気店に
なった。そのため、順番待ちの客はパ
ーティで席が空くまで本を読んだり、
「カベレフト」で写真を見るなど待つこ
とが多い。今年6月に開業した着物屋
の「tawaraya」は、若い人にも
身近に感じてもらえるような日常使い
の着物や小物を販売している。

このようにレトロフットセでは、ア
パートの住人やテナントで入居してい
る人たちがそれぞれの得意分野を生
かし、ともに空間を作り上げているの
も大きな特徴だ。そのつながりが何よ
りもうれしいと、二人は感じている。

また、毎週金曜日にリゼット広場で
開催されている金曜日には、花田さん
も定期的に出店している。

「ここにいる方たちって、皆さんのす
ごく大人だと思うんですよ。はたから
見たらふざけたことをしているように
見えるかもしれませんが、決して子ど
もではない。信頼して相談もできるし
頼れるけれども、ちゃんと各自が責任
を負っている。そんな場所だと思いま
すね(花田さん)」

開業当初、少し入りづらいという意
見もあったと二人は苦笑する。自分た
ちの理想と現実とのバランスを考えな
がら、それでも決して妥協をしなかつ
たことが、レトロフットビルにしかない空
気感を生み出したのだ。

個が大切にされる長屋。 その意識を大切に

9月のある水曜日。夜の7時を過ぎ
たレトロフットセは、本来の閉店時
間を過ぎてもにぎわっていた。この日
はレトロフト専属楽団「イ・レトロフチ」
のデビューコンサートが行われる日だ。

メンバーは永井さん夫妻に、花田さ
ん、松本さん。そして花田さんいわく
「私が金曜日でリコーダーを吹いてい
るときに、いきなりパーカッションを始
めた」という藤崎祐至さん。「イ・レトロ

フチ」は「レトロフトの人々」を意味す
るイタリア語。音楽をもっと身近に、
人の心に優しく寄り添う形で聞いてほ
しい。そんな思いと、たまたま友人から
寄贈されたハモンドオルガンが楽団誕
生のきっかけとなった。

リゼット広場を囲むように集まった
観客は40人以上。入場は無料。能を学
んでいる「tawaraya」のご主
人、俵積田寛志さんがケルトの吟遊詩
人タリエシンの詩を朗読し、詩に合わせ
て音楽が奏でられていく。その後も「ア
ヴェ・マリア」「ナイチンゲール」など音楽
が、室内に軽やかに優しく流れた。

二人は、「Citizen」という言
葉をレトロフト運営の基軸として大切
にしている。一般的に日本語の訳では
「市民」や「市民感覚」と表現されるこ
とが多いが、ヨーロッパで使われている
本来の感覚とは少し違うような気が
していたと明弘さんはいう。

「しかし最近、この言葉の完璧な超訳
を発見したんです。それって『長屋』な
んじゃないかと。いろんなタイプの人た
ちが自在に、自由に、思いのままに思
うことをしゃべり、いろいろなトラブル
も発生するかもしれないけれど、平等
な町民感覚のなかでとりあえずは人



レトロフト専属楽団「イ・レトロフチ」のデビューコンサート。永井さん夫妻をはじめ、皆さんが楽しく演奏しているのが印象的だった。



情と笑いのうちに問題解決する。落語
でもよく長屋は取り上げられます。大
家は長屋の取りまとめ役とはいえ、時
として住民におちよくられたりするこ
ともあります。ここでは、日本文化の
中では例外的に『個』が大切にされて
います」

そう感じるのは、以前二人がミラノ
に留学していた影響も大きい。ミラノ
で感じて心と体に取り入れた感覚は、
人間中心主義のフィロソフィー。それ
は封建的な日本のサラリーマン社会の
対をなす言葉だ。レトロフトの根底に
は、二人のそんな思いが流れている。
「大家はいるけど最後まで口出しはせ
ず、番頭さんが長屋の調和をはかりつ
つ毎日のドタバタに全員をまきこんで
演じていく舞台。レトロフトビルはそん
な雰囲気に近い場所だと自負してい
ますし、これからもそうであってほしい
と願っています」

レトロフトビルがある名山町には、
今では貴重な存在となった長屋が存
在している。しかし、そこも含め、かつ
て人の流れがあまりない時があった。

そのようなまちをアートで変えて、人
の流れを生み出していきたい。二人に
はそんな思いもあったという。

最後に「古書リゼット」の安井さん
が、こう教えてくれた。

「ここでは永井さんがご隠居さん、僭
越ながら私が番頭と呼ばれているん
です。この言葉だけでも、このビルの雰
囲気が少し伝わってきますか」

ビルに住む人、商いを行う人、集う
人……。それらのつながりによって、独
特の雰囲気少しずつ熟成されていく
ような感覚が、このレトロなビルにはあ
る。かといって、決して外部の人を拒ん
でいるわけではない。

「将来のビジョン……。実はないんです
よね(笑)。もちろんこれまで、こうして
いきたいという気持ちで動いてきたん
ですけど、私たちが想定している以上
のものが、いきあたりばつたりのわり
には生み出されてきたんじゃないかと
思います。それはやっぱり、人と人の出
会いによって誕生したもの。その出会い
を、これからも積み重ねていければと
思います」

これからもっとたくさんの人が訪
れることによって、レトロフトビルはさ
らに新しい展開を迎えていくはずだ。
そしてそれを一番楽しみにしているの
は、ほかならぬ永井さん夫妻に違いな
い。ちよっとレトロなこのビルは、今日
も新しい出会いを静かに待っている。